

平成 20 年度海外研修派遣報告

野崎徳洲会病院 瀨田 有子

7月20日から27日までの1週間、米国のスタンフォード大学にて海外研修をさせていただきました。1週間という短い期間でしたが、予想以上に充実しており、大変有意義なものでした。

1. 参加した目的とその成果

今回、スタンフォード研修に参加させていただいた目的は、現在私が興味を持って取り組んでいる心臓 CT について学ぶことでした。アメリカでの心臓 CT の現状や最新技術、研究内容などの新しい知識を増やすことを目的としていました。それに伴い、3D Imaging Lab の見学にも期待をしていました。その成果についてですが、心臓 CT に関する講義は少なく、残念ながら期待した成果を得ることはできませんでした。しかし、スタンフォード大学で行われている最先端の Molecular Imaging により冠動脈のプラーク性状がわかるかもしれないという内容は、非常に興味深く聞くことができました。3D Imaging Lab に関しては、もう少し多くの画像を見ることが出来ればもっと良かったです。見ることでできた範囲で感じたことは、作成された 3D 画像は日本と大差はないが、誰が作成しても同じ結果になるという徹底したマニュアルには感心しました。

2. 日本と米国の放射線技師制度の違いをどのように感じたか

日本でもあらゆるモダリティにおいて専門技師制度が整いつつあるが、米国での専門技師制度とは大きく違う印象を受けました。多くのモダリティに携わる日本の放射線技師と違い、米国の放射線技師は専門とするモダリティにのみ従事しないことに驚きました。そして、その資格に（モダリティによって）ランクがあるように感じられました。しかし、米国での更新制度はしっかりしており、見習うべきところがあるように思いました。米国ではモダリティ間の横のつながりがなく、1人の患者さんに対して行うチーム医療として考えた場合には、日本の方がいいと思いました。日本と米国どちらにも良し悪しがあり、また医療制度も大きく違うため、一概に比較することは難しいです。米国の制度のよいところを取り入れつつ、日本でもよりよい医療を提供するための制度作りが出来ればいいと思う。

3. 今回の研修で得たことを今後どのように活かしたいか

スタンフォード大学での最先端の研究や技術を学ぶことで、私の今後の方向性に大きな影響を与えたことは間違いありません。本当に貴重な経験をさせていただきました。このような貴重な経験を多くの若い放射線技師にも感じて欲しいと思います。そのためにも、この研修で学んだことや経験を伝えていくことは、研修に参加した者の使命だと思い、今後さらに研究に取り組んでいきたいです。

最後になりましたが、海外研修の機会を与えてくださった日本放射線技術学会の学会長はじめ学会関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。本研修に多大なご尽力をいただいたスタンフォード大学ならびに GEYMS の皆様、今回引率をしていただいた島根大学の内田さんに深く感謝いたします。また、私を快く送り出してくださった野崎徳洲会病院的の三木田技師長、スタッフの皆さんに感謝します。



大好きなオロナミン C を美味しそうに飲む
Course Director Dr.Moseley